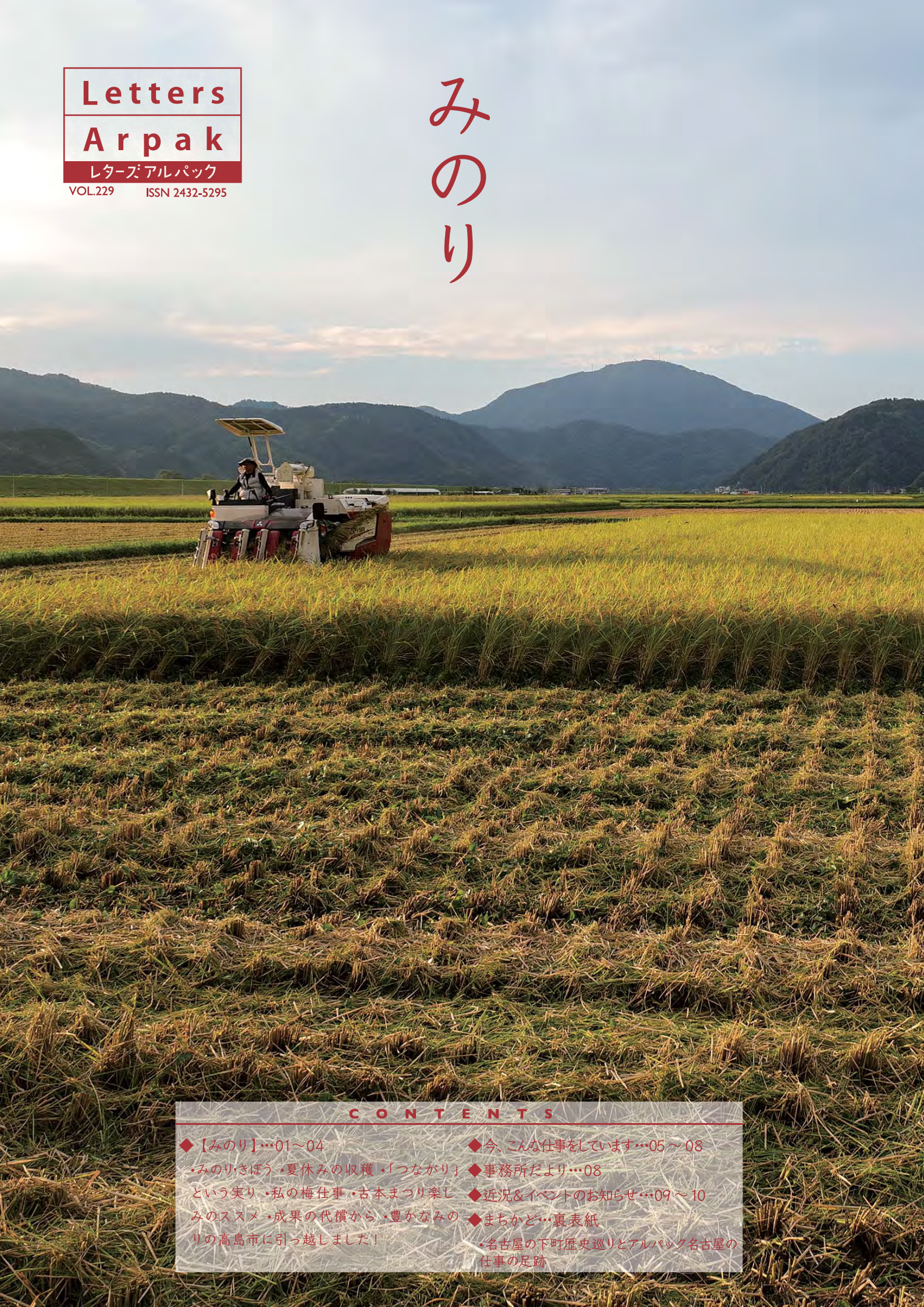
Letters
Arpak
レターズ アルパック
VOL.229 ISSN 2432-5295

みのり



CONTENTS

◆【みのり】…01～04
・みのり・さぼう ・夏休みの収穫 ・「つながり」という実り ・私の梅仕事 ・古本まつり楽しみのススメ ・成果の代償から ・豊かなみのりの高島市に引っ越しました！
◆今、こんな仕事をしています…05～08
◆事務所だより…08
◆近況&イベントのお知らせ…09～10
◆まちかど…裏表紙
・名古屋の下町歴史巡りとアルパック名古屋の仕事の足跡

みのり

世の中には努力をしなくても優れた成果を出す人がいて〝天才〟と呼ばれます。

一人の天才と凡人の集団のどちらが優れた成果を出すことができるのかは、いろいろなところで議論されています。私のような凡人にはその答えは分かりません。しかし、少なくとも凡人の集団が一人の天才と同等、場合によっては天才に勝る成果を出すこともあり得るというのは間違いではなさそうです。これをコレクティブ・ジーニアスというそうです。

凡人の集団が努力して、苦労を重ねて、ようやく出した成果、それを〝みのり〟と呼びたいです。少々クセのある（？）凡人の集団であるアルパックも、コレクティブ・ジーニアスで豊かな〝みのり〟を生み出せる集団でありたいと思っています。

レターズアルパック編集委員会

みのり・きぼう

三輪泰司：
名誉会長

皆さん、何か実のなる木を育てていらっしゃいますか？

我が家のイチジクは8月から9月が盛りです。1本で50～60個、近所の子ども達に配るのに充分です。

中学校の一年から12年、祖父母の隠居で暮らしました。隠居といっても200坪ほどあって、半分は畑でした。御所の西、府庁の北、街の中で畑仕事です。少量多品種です。主食用のジャガイモ、サツマイモに、陸稲はワラをとるため。瓜科はつくりやすい。カボチャ、キュウリから、カンピョウ、ヘチマ、ヒョウタンまで作りました。もともとが、味噌屋ですので、ナスやキュウリが出来過ぎても味噌漬けにします。

果樹はカキ、ビワ、クリ、グミ。夏ミカンはしなって地面に着くくらい。大きなイチョウは残念ながら銀杏が出来ない。ここは、もと、宮中のお局さんのすまいだったそうで、南国の生まれか、棕櫚が6本もあり、バナナもありました。

ニワトリは三種で15～16羽。毎朝、タマゴを収穫。トリの糞は乾かして畑の肥しに、大根の葉は、刻んでトリの餌に、完全なリサイクルです。ゴミもゼロです。全て、祖母に教わりました。

実は、この「農業」の経験が、アルパックの経営にたいへん役立ったのです。アルパックの業種・業態は、知的サービス。第三次産業で、第一次産業の農業とは、違うじゃないのといいますが、それは「社会学」の分類です。

「事業経営」の目で診ると、共通の原理は、設備投資、自己資産強化です。農業を営むには、生産手段としてまず土地、水利から種苗、果樹の苗木も投資です。着実に自己資産を強めるのです。

サービス業は見えにくいです。年1回、決算で社長は気が付くのです。「償却」は農林業では、自然に従って、毎年か何十年かですが、サービス業では、人為的に定額法とかで減価償却します。不動産資産が減っていると気付きます。これはいかんと、自己資産を増やし、社員に希望をあたえます。

我が小さな果樹園の希望。来年は、モモを植えてやろうかな？

夏休みの収穫

橋本晋輔：
都市・地域プランニンググループ

我が家には小学生の子どもがいるのですが、最近社会科の成績が下降気味。ちょうど懇談会があったので先生に様子を聞くと、地図の読み方や、大阪市内の地理を勉強しているようで、どうもクラスの他の子も苦戦しているようです。たしかに、これまで狭い世界で生きてきた子どもたちに突然、大阪市の平野区には農地が多い、大正区には工場が多いなどと言っても、正直難しいよなと感じます。

ちょうど夏休みの時期だったので、いくつかの区を子どもと一緒に巡ってみました。これが意外と大変で、エリアの特性を知るには、うろうろしないと雰囲気が分かりません。汗だくになりながら歩き回りましたが、なかなかこれを授業でやるのは大変ですね…。

帰ってきてふと思ったのですが、私たちが住む地域にも、いろいろなお店や会社があり、多くの人たちが働いています。また、子どもたちの親の中にも地域で働いている人が何人もいます。子どもたちの身近なところにも、その地域ならではの産業があり、活動が行われているのだから、まずはそこから学ぶ方が社会を理解しやすいのではないかと。大人でも普段、表層には現れてこない地域の特徴を知るということができると楽しいですよね。そんな学びの場があるといいなと感じました。

ちなみに今回のお題の「収穫」ですが、市内巡りの際、渡船に乗ったりと楽しめるように工夫はしたのですが子どもの反応はいまいち。いつか収穫があればいいですがそればかりは分かりません。

「つながり」という実り

髙瀬咲：
地域再生デザイングループ

これまで、東京、北関東、北陸、関西とで居住地が変わってきました。今の時代、ＳＮＳで友人たちの近況を知ることができるため、引っ越してそれっきり縁が切れるなどということはないのですが、なんとなくつながれている分、「いつでも会える」という意識から逆に連絡をとらないというところもあります。

しかし、ここ一年、「いつ会えるかわからない」状態が長引いたことで、後輩、先輩、友人、両親、兄姉家族等いろんな人と様々なツールを使って通話する機会が増えました。その中で、数年来話していなかった先輩と近況報告会をしたり、甥が画面越しにピアノをきかせてくれたり（直接だと恥ずかしがって弾いてくれない）、「会える」ことが前提なら起こりえなかったコミュニケーションがたくさん生まれたように思います。

つながりの継続という面でも変化があり、学生時代お世話になった地域の住民さんと月１回Ｚｏｏｍをしたり、遠くに住んでいて今までなかなか話せなかった友達との定例オンライン会が始まったり、学生時代の自主ゼミがそれぞれの居住地が変わっても続いたりと、ＳＮＳとは違う新しい形で、オンライン上にコミュニティが形成されているように感じます。

会えないということが逆に、人との関係の中に自分が根付いているということを再確認させ、「新しい形のつながり」という実りを生んだと考えると、これはコロナ禍での「分断」から実った「収穫」なのではないかと思いました。

気軽に対面で会える日まで、今生まれたコミュニティという土壌を耕していきたいです。

オンラインで側転を披露する甥

私の梅仕事

鮒子田稔理：
建築プランニングデザイングループ

私の梅干し修業は二年目に入りました。梅干しは一度漬け始めたら三年は続けなければいけないと言われています。

「梅を塩漬けして赤紫蘇で色をつけて、天日で干したもの」単純に言うとそれだけのものですが、梅の選び方、塩分をどれくらいにするか、干す時の天候の見極め方など、レシピは、あってないようなもので、自分の五感を使って納得のいく梅干しを完成させるには三年では到底足りないと感じています。

「梅干しが上手く漬からない年はいい年にならない」という古くからの云われがあります。これは、自身の体調なども関係するかもしれませんが、天候が悪ければ梅の実だけではなく、他の農作物にも影響がありますし、今年のように、例年ならカンカン照りが続く八月に長雨が降って干すタイミングを逸してしまうこともあります。

梅干しには欠かせない赤紫蘇が、今年は豊作で、しかも梅よりも早い時期に出回り始めました。これも温暖化の影響でしょうか。一度に収穫した農作物は一気に手を加えなければいけません。今年は、梅干しに使うだけでは消費しきれず、「(今年は)赤紫蘇ジュースを濃いめに作った」、「自家製柴漬けにしてみた」など、あちこちで赤紫蘇便りが聞かれました。

大地の恵みに少し手間をかけ、お天道様の助けを借りて仕上げる楽しみを感じつつ、日本の気候風土が本来のリズムを取り戻すために自分が出来ることを心掛けたいと思います。

古本まつり楽しみのススメ

石川俊博：
公共マネジメントグループ

私の生活の中で「収穫」らしきものは毎年の古本まつりの戦利品（＝購入本）でしょうか。

古本まつりとは、古書店が一堂に会して開催する即売会で、要は古本屋さんのマルシェのようなものです。関東では商業施設の催事場で開催されることが多いですが、関西では寺社仏閣の一画を会場として開催されることが多いのも特徴です。

私の年間スケジュールは、夏の京都・下鴨神社、秋の大阪・四天王寺と大阪天満宮、秋の京都・知恩寺にはだいたい参加、気が向けば春の京都・みやこめっせに向かうといったところです。

初めて参加した学生時代は、面白そうな文庫本を探したり、読みたい本が安くなっていないかと探したりしましたが、最近はもっぱら均一台という3冊500円や1冊100円の本が集まる台で、ネットでは発見できない本、戦前の本、開くまで内容が分からない古雑誌、安価な絶版本等々を拾っています。誰かから見れば古くて謎で一見すると要らない本であっても、我々のような人間が拾っていくことで、結果的にサスティナブルな社会に貢献するイベントになっています。

下鴨納涼古本まつり

100円コーナーでの拾い物

また、50年近く前の雑誌は「自動車は都市をどう変えるか」「70年大阪万博後の大阪の文化」のようなテーマもあったりで、現代との答え合わせも楽しんだりできます。

最近はコロナ禍で中止となることも増えていますが、楽しみ方は様々ですので、散歩コース、気分転換、仕事のヒント探し、お宝探しなどで、ぜひ一度お越しください。

成果の代償から

豊福宏光：
サスティナビリティマネジメントグループ

「収穫」といえば、農作物を収集することしか思いつかず、私にとっての収穫を考えた時に、「得られた成果」ということを切り口に書いてみることにしました。

私は学生時代、常に頭の中だけで考え、悩み、グルグル回って、結局何も行動を起こさない日々を過ごしていました。そこから、就職を機に過去に行動できなかった自分を省み、実務的に成果が望めることを優先し、可能な限り合理的な行動を心掛けていました。

その結果、物事は進み、様々な成果（経験知や交友関係等）を得られ、今でもそれは自分にとってとても大切な財産となっており、充実した日々だったと思っています。

しかし、効率や合理性を重視し過ぎた結果、自分自身をおざなりにしてしまい、結果的には、物事が思っていたように進まず、自分が思い描いていた人生設計から後退してしまったように感じる時期もありました。

その経験から思ったことは、成果（収穫）ばかりを追い求めず、かつ成果（収穫）の量も自分の身の丈にあった分だけあれば良いのではないかと考えるようになりました。

そして今、世間では、気候変動対策等から脱資本主義の議論や、コロナ禍で海外・県外に出ることができず、近くにある地域資源の見つめ直しがされており、自分の働き方や考え方、時間の使い方、お金の使い方等、生き方を少し考え直す時期だと思っている日々です。ただ、自分自身が成長する喜びを実感することはとても満たされることなので、これからも日々努力を続けていき、自分を軸に自分のできる範囲で他の人の力になりたいと思っています。

豊かなみのりの高島市に引っ越しました！

ホアン ゴック チャン：
地域産業イノベーショングループ

私事ですが、今年の春に大阪から琵琶湖の北西部に位置する滋賀県高島市に引っ越しました。

これだけ聞くと、多くの方は「何があったの？」と驚きを隠せないかもしれません。確かに、外国人女性一人で、来日して働いて、大都会から田舎に引っ越しするなんて考えられないですよね。しかも、引っ越し先は空き家でした。

高島市との最初のご縁は、以前自転車で琵琶湖一周する時に訪れたところから始まりました。山、そして湖が揃い、自然が豊かで気に入りました。

昨年の仕事でも、真冬に訪れましたが、何だかほどよい田舎の雰囲気で落ち着いた気がします。

空き家の家は、住める状態になるまで、下水工事をお願いしたり、DIYしたり、色々手間がかかりましたが、それも楽しかったです。そして、何より憧れた家庭菜園もついに手に入れました(^^)。今年の夏には、欲張って、夏野菜やベトナムのハーブ19種類などたくさん植えました（笑）。おかげさまで大豊作です。

季節は秋になりましたので、ぼちぼち秋野菜を頑張って作っています。

わが家で収穫した最後の夏野菜たち

徳島のまちなか「ひょうたん島」を彩る魅力を探して

山本貴子：
地域再生デザイングループ

〝徳島といえば？〟阿波おどり、眉山、藍染、徳島ラーメン等…いろいろな魅力がありますが、そんな魅力あふれる徳島市で、現在、中心市街地活性化基本計画（以下、中活計画）の策定に向けて検討を進めています。

今回の検討では、新たな試みとして、市民の皆さんに中活計画をより身近に感じてもらえるよう、中心市街地を一つのテーマパークと見立て、中活計画を『ひょうたん島フィールドテーマパーク構想』としてとりまとめています。

そして、いつの日かテーマパークの〝キャスト〟となるであろう、まちなかで活動されている事業者や学生を対象に、全2回のワークショップを開催しました。第1回のワークショップでは、まさに冒頭の問い〝徳島といえば？〟をテーマに、まちなかの資源を出し合いました。誰もが知っているものから、市民の方ならではのものまで、たくさんの資源が見つかりました。第2回のワークショップでは、資源を楽しめる場面づくりとして事業につなぐアイデアを出し合いました。

ワークショップの様子

ワークショップを経て、改めて感じたことは、市民が考える資源とよそ者が考える資源は違う。意味あるワークショップとするためには、参加者と主催者のレベル（目的）を合わせることが重要。そして、地域の魅力に気づいてもらうことも、参加者・主催者のレベル差を和らげることも、コンサルタント（ファシリテーター）の役割。ワークショップは何度経験しても、人やまちとの出会いの数だけ学びがあります。

徳島市の中心市街地は川に囲まれひょうたんの形をしています
（国土地理院　空中写真）

持続可能な地域づくりへ貢献する賃貸住宅プロジェクトを進めています

塗師木伸介：
建築プランニング・デザイングループ

現在、大阪市内における賃貸住宅のプロジェクトが進行しています。

規模としては6階建20戸と大きくありませんが、クライアントと一緒に「持続可能な地域づくりへの貢献」を掲げ、プロジェクトを進めています。

具体的には住宅を将来2戸1化できるようにすることでニーズの変化による建築の陳腐化回避や風通しの良い住戸プランによるエネルギー使用の低減、グランドレベルのコミュニティの場づくり等を行おうとしています。

それらの取り組みの一つとして、内装を一部木質化し、使用する木材についても大阪府内産材を使用することで、地域内での資源循環に貢献しようとしています。具体的にはエントランスやバルコニー軒天等の人が良く触れ、よく見える所に木材を仕上げとして使用する予定です。

また現在、その材料の一部に平成30年台風21号により発生した風倒木を活用できないか、と製材所の方々と一緒に検討を行っています。

平成30年台風21号では大阪府内各地の山林等で強風により木々が折れてしまう等の風倒木被害が発生しました。被害面積約728ヘクタールのうちの大半である約613ヘクタールが高槻市で発生しています。

風倒木被害のあった高槻市内山林の様子

被害発生から3年が経過しましたが、現地は被害を受けた木々が残されており、林業関係者の方々が努力をされていますが、復旧まで未だ道半ばといった状況です。現地に残された風倒木を運び出し、活用していくことが森林再生に向けた第一歩となります。本プロジェクトにおいてもそれらの木材を活用することで少しでも力になれればと考えています。

プロジェクト自体も竣工まで道半ばですが、民間の賃貸住宅プロジェクトがどのように持続可能な地域づくりに貢献できるか引き続き考えていきたいと思います。

かもわけいかづち
賀茂別雷神社の大鳥居とバス駐車場周辺整備

水谷省三：
都市・地域プランニンググループ

賀茂別雷神社（通称：上賀茂神社）の「大鳥居」と宮前広場西側付近のバス駐車場周辺の整備は令和2年5月から工事が始まり、令和3年3月にバス停など一部供用を開始しながら、7月に大半の整備が概成しています。

この神社の宮前広場周辺の整備工事と合わせて、神社の西側に流れる賀茂川に架かる御薗橋の架け替え工事や、御薗橋西詰から神社までの道路拡幅整備、宮前の交差点をロータリー交差点にするなど、隣接する公共空間等の整備が並行して行われていました。これらの御薗橋から宮前の参道空間が広がったことで、御薗橋から見る宮前広場と新設「大鳥居」と既存の「一の鳥居」、その背後に見える神山（こうやま）が象徴的な眺望を生み出しており、新たな神社の顔として見えてきます。

①「大鳥居」の完成を祝うくぐり初め式（令和２年12月）②御薗橋から見る「大鳥居」と「一の鳥居」、その背景に見える神山の緑 ③白御影石の参道 ④御手洗川付近から見る宮前広場と「大鳥居」

境内地に配置されたバス停

また、整備前の宮前広場では「一の鳥居」付近に、市バスや大学のシャトルバス、観光バスなど複数のバス車両が乗り入れ、バス車両と歩行者が輻輳していました。今回の整備において、バス停やバス駐車場を宮前広場西側に集約配置したことで、限られた空間を活かしてバス車両と歩行者動線を分離することができました。この歩車分離の実現により、「大鳥居」から「一の鳥居」付近の宮前広場は、歩行者利用を主とした、安心快適な宮前広場となっています。この宮前広場には「大鳥居」の下から白御影石による石畳（一部整備中）の参道が造られ、参拝者をお迎えしています。

アルパックでは、神社の宮前広場等整備に際して、平成30年から宮前広場・駐車場周辺整備基本設計等をお手伝いし、令和元年以降、京都市デザインレビュー制度に係る協議や文化財や風致地区等に係わる各種許可申請業務や協議調整等を行ってきました。

ゆる～く「学び」を考える

稲垣和哉：
都市・地域プランニンググループ

時代の変化とともに、学校の形態も変わってきています。

高度経済成長期には、全国民に教育を提供するという考えのもと、校舎や教育プログラムは画一化され効率的に整備・提供されました。以降、バブルの崩壊・リーマンショック・東日本大震災等、価値観の転換を促す様々な出来事を経て、ゆとり・生きる力がキーワードとなり、自発的な学びを生み出すための空間、サポートのあり方に重心が移ってきました。

そして現在は、これまで教育の場であった学校から、学びの場としての転換が進み、教室に閉じない、地域と連携した学びの実現に向けて様々な取組が進められています。

ガリバーマップでアイデア出しをしている様子

今回、高槻市の富田地区というところで、類設計室さんと共同で「新しい学校づくり」をテーマにしたワークショップを開催しました。小中一貫校の実現に向け、「富田地区のまちづくり」の中心となる「学校づくり」とはどのようなものか、地域の方々とアイデアを出し合いました。「学び」をキーワードに、「地域全体での学び」「学校内での学び」の2つの観点からイメージを深めていきました。「地域の全体での学び」では、2.5メートル×2.5メートルのガリバーマップを作成し、地図の上にのりながら、地区の隅々まで見渡しました。普段見る地図とは異なるスケールなので、慣れるまでは若干の戸惑いもありましたが、大きいだけでも面白いということでわいわい盛り上がりました。

いろんなアイデアが出ましたが、個人的には「成人式に飲むためのお酒を小学校の時に仕込んでおく」「酒蔵を学校に併設して、地域の人が集まって酔える場をつくる」などが面白いなと思いました（富田地区には酒蔵がいくつかあります）。学びというと真面目に考えてしまうかもしれませんが、これくらいのゆるさが必要なのかもしれません。

岬町の都市計画マスタープランとみどりの基本計画を策定支援しました

石川聡史：
都市・地域プランニンググループ

大阪府の西南端に位置する岬町は、人口約1.5万人の海と山の自然に恵まれた町です。

この岬町で令和元年度から今年の5月まで策定を支援した都市計画マスタープランとみどりの基本計画をご紹介いたします。2つの計画を同時に受注したことで、両計画にまたがる分野の自然環境や公園等の方針検討、関係者協議、審議会対応などについて相互連携しながら検討を進めることができました（なお、両計画と合わせて総合計画の策定も支援しました）。

【都市計画マスタープラン】

岬町と言えば泉州地方や和歌山の方であれば「遊園地・みさき公園がある町！」とすぐ思い浮かぶのではないでしょうか。しかし、その「みさき公園」も2020年3月末で閉園しました。この他にも人口流出、雇用の場の減少など厳しい状況に直面しています。そのため、本町の特徴である豊かな自然環境や充実しつつある交通ネットワークを活かしながら、いかに地域の活力を創出するのか、という点が今回の改定の大きなテーマのひとつでした。また、今後、発生が確実視される南海トラフ地震や、近年頻発する台風被害への対策も喫緊の課題です。今回の改定では、このような点を意識しながら、快適で安全・安心に住まい・憩えるまちを目指す計画づくりを行いました。

【みどりの基本計画】

岬町には、現在跡地活用が検討されているみさき公園のほかにも関西国際空港二期事業土砂採取跡地に整備された「いきいきパークみさき」や海沿いにある「せんなん里海公園」など豊かな自然を活かした公園があります。人口一人当たりの都市公園等の面積は約79平方メートルで大阪府平均の13倍にもなります。みどりの基本計画では、これらの公園や自然豊かな山林のほか、集落や住宅地の広場など住民に身近なオープンスペースについて、適切な維持・管理や保全を進めていくだけでなく、様々な分野で活用を図っていくことを盛り込みました。

※この業務は、清水、松下、松川も担当しています。

これからの50年に向けた未来を考えるワークショップ

太田雅己：
地域再生デザイングループ

祝、奈良県生駒市は今年で市制50周年を迎えます。

50周年記念事業の一つとして、20代までの若者を対象とした「これからの50年後に向けた持続可能なまちのあり方」を考えるワークショップをお手伝いしています。「いこまミライ創発会議」と題して、全6回にわたるロングランのワークショップです。

生駒市の若者は市外に通勤・通学している人が多く、市内で過ごす時間が少ないという声がありました。そこで、自分の住むまちの魅力や課題を振り返り、その上で暮らしをより良くするためのプロジェクトを考えていきました。

第1回では雑誌やパンフレットを切り抜いて、発想のネタを集めてアイデアを考えるコラージュワークショップをしました。

第2回では、神戸市塩屋でイベント企画や作品づくりを通してまちの良さを発信しているアーティストの森本アリ氏を講師に招き、講演いただいた後、各チームが1回目で考えたアイデアを更に深めていくという回でした。

ワークショップの様子

コラージュして作成した第1回目のアイデア

第3回目と4回目は、関西圏でコロナの感染者数が増加してきたことから、残念ながらオンラインでの開催となりました。しかし驚いたのが、さすがデジタルネイティブ世代です。オンラインでもほとんどの参加者が問題なく対応でき、むしろ、様々なWEBツールを用いて、対面ではできないような効率的な作業をするチームもありました。

「生駒市のデートコースを考える」「人それぞれの自分だけのいこまの地図を作ってそれを集める」「坂や階段など、生駒市ならではのディープな風景を集める」など、面白いアイデアがたくさん生まれています。

このワークショップから始まったプロジェクトのタネが、多くの人の元に届き共感を生み、芽を出すことを願って、残り2回も楽しみながらアイデアを深めていきます。

八尾市で「文化的コモンズ」の形成に向けた取組が始まっています

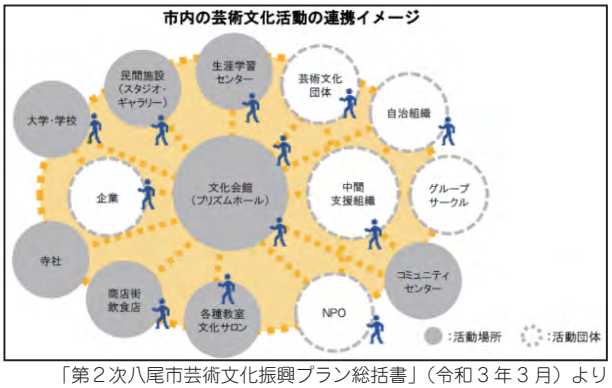
江藤慎介：
地域産業イノベーショングループ

大阪府八尾市はものづくりのまちとして、また河内音頭や河内木綿のまちとして有名ですが、現在、芸術文化振興に関する条例制定及び条例に基づいた次期プラン策定に取り組んでいます。

八尾市ではこれまで、文化会館「プリズムホール」を中心に芸術文化の振興に努めてきました。一方、現行プランを総括する昨年度の市民会議において、「文化会館をはじめ、市内の文化施設やコミュニティセンター、さらには民間施設で行われている芸術文化活動の連携を促進する」ことが提案されました。

（一財）地域創造「地域における文化・芸術活動を担う人材の育成等に関する調査研究報告書」（平成28年3月）では、地域の共同体の誰もが自由に参加できる入会地のような文化的営みの総体を「文化的コモンズ」と称しています。地方自治体の文化事業は、これまで公共文化施設が担っており、中心的な役割を果たす一方で交通アクセスや芸術文化のジャンル・内容等の観点から、一部の市民利用に留まる傾向も見られました。近年、芸術文化による積極的なアウトリーチ活動や社会包摂の取組が盛り上がりを見せる中、八尾市では市内全域で芸術文化活動が取り組まれ、市民が芸術文化をより身近に感じられるとともに、これらの活動や拠点が有機的につながることを目指し、審議会やワーキング部会、またワークショップなどを通じて、その取組アイデアや仕組みづくりの検討を進めています。

8月には芸術文化振興に関する条例の骨子について答申が行われ、「芸術文化による八尾ならではの創造と交流の基盤」を形成していくことが目指す姿として描かれました。これを実現するため、現在は具体的なアクションや推進体制を検討しているところです。



「第２次八尾市芸術文化振興プラン総括書」（令和３年３月）より

九　州

「新たな街へと移ろいゆく福岡」

九州事務所　益戸亮平

昨年度まで大阪事務所のサステナビリティ・マネジメントグループでサポートスタッフとしてお世話になっておりました。春からは生まれ育った九州の地、新たな環境で日々経験を積んでいます。大分出身で福岡での生活は初めてですが、人も気候もあたたかな環境にどこか懐かしさを感じています。

福岡に来た当初は、路線バスが高速道路を走行していることに違和感を持っていました。福岡市内の路線バスは全国的にも珍しい高速道路を走行する路線が数多くあり、市民の通勤通学の手段の１つとなっています。

現在、福岡市では「天神ビッグバン」という中心市街地の再開発プロジェクトにより街並みが変わりつつあります。32年間天神のシンボルとして親しまれた商業施設「イムズ(IMS)」は８月末で閉館し、建物の解体が決まっています。また、福岡市役所周辺では再開発に向けた工事も進行しています。

このように中心街の変化はありますが、福岡には昔から屋台文化があり、屋台が市民の生活の一部に溶け込んでいます。新型コロナの影響で屋台を見る機会が少ないのが個人的には残念ですが、いつか屋台巡りもしたいものです。

この状況が落ち着きましたら、新たな街へと移ろいゆく福岡に足を運んでみてはいかがでしょうか。

京　都

事務所だより

「京都のマスタープランが完成」

京都事務所　松本明

京都事務所で３年にわたって策定をお手伝いしてきた京都市基本計画「はばたけ未来へ！京（みやこ）プラン2025」が今年３月に完成しました。京都市基本構想に基づく第３期目の基本計画です（第２期も受託）。また、この８月には「各区基本計画」が完成しました（こちらは第１期、第２期、第３期とも受託）。京都事務所と大阪事務所のスタッフが11の行政区を受け持つチームを編成し、市民とのワークショップ等を通じて計画の練り上げを図ってきました。

コロナ禍のなか、自治体運営はますます厳しさを増していますが、市民と行政の共通の羅針盤としての役割を果たすことができるマスタープランのあり方を今後も追及していきたいと思います。

7.17「中小企業の日」企画、開催しました！

杉原五郎
相談役

「中小企業の日」、ご存知でしょうか。日本政府は、2年前、中小企業基本法が制定された7月20日を「中小企業の日」、7月を「中小企業魅力発信月間」としました。これを受けて、大阪府中小企業家同友会では、中小企業が日本社会で果たしている経済的役割、社会的存在意義を高める取り組みを進めています。

大阪府中小企業家同友会は、今年の7月17日、大阪産業創造館で、企業展とフォーラムを開催しました。企業展には、49社の企業が出展し、それぞれの企業の魅力を参加者にアピールしました。フォーラムは、府立西成高校の山田勝治校長先生に基調講演をお願いし、山田校長先生、府立布施北高校の村田知子校長先生、（株）大阪工作所の高田克己社長、（株）リーファの原田直美専務、（株）吉田機工の今井重一社長によるパネル討論がされました。「次世代を担う若者に就労の場を提供し、働きながら生きる力を育む」をテーマに、熱い討論が展開されました。企業展に250名、フォーラムに70名余の参加でした。

中小企業は、現在、約380万社が存在しています。企業数の99.7%、雇用の7割を占めています。中小企業は、日本経済を牽引するとともに、地域社会の主役として重要な役割を担っています。ちなみに、資本金5000万円、従業員数80名の弊社アルパックも、文字通り、中小企業です。

2000年に、リスボンサミットで「Think Small First」（小企業のことをまず考えよ）が宣言され、EU小企業憲章が制定されました。2017年には、国連総会で、6月27日を中小企業の日と決議されました。中小企業を大切にする潮流は、世界の大きな流れとなっています。

適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

36回　2021年7月16日

「イタリアの小さな町 暮らしと風景～地方が元気になるまちづくり～」
講師 建築家（メルカテッロ名誉市民）井口勝文氏

第36回は井口勝文氏を講師に、猿渡彬順氏をコメンテーターにお招きし、中部イタリアの小さな町、メルカテッロを舞台にした「イタリアから学ぶ豊かな暮らし」についてお話をいただきました。

前半は、井口さんがメルカテッロでの生活を通して感じられた、美しい風景をはじめとしたイタリアの豊かな暮らしと、自分たちで工夫しながら地域経済を循環している商・農・工業などの様子をご紹介いただき、後半は、それらを支える風景計画を最優先にした都市計画と、地方分権を徹底した地方自治のしくみについてご紹介いただきました。

井口さんは、これらの豊かさの背景には、郷土愛がとても大きく関わっており、まずは「自分たちは十分豊かである」ことを自覚することの重要性と、小さな町でも、自分たちで何とかしようと努力し、工夫する姿勢をイタリアの豊かな暮らしから学ぶことができるのではないかと示唆されていました。

イタリアと日本、社会的な背景や価値観は違っていても、まずは自分の町の良いところに気づくことは、地方のまちづくりを考える原点であると感じました。（新開夏織）

37回　2021年8月27日

「ローカル・メディアのこれから～13年間の「島民」発行から見えてきたこと～」
講師　大迫　力　氏

第37回適塾路地奥サロンでは、大阪・中之島エリアのフリーマガジン『島民』をはじめ、さまざまな媒体の企画・編集・執筆を行う大迫力（おおさこちから）氏をお招きしました。

講演の中では、「ローカルメディアとまちづくりのこれから」をテーマに、『島民』作成の裏側や、SNSが主流となった現在、様々な媒体同士をいかにつなげ、魅力的なコンテンツを発信していくかについてお話しいただきました。

13年間発行された『島民』では、中之島を生活の場と捉え、生活していることに対する愛着をもってもらうことを大切にしていたとのこと。大迫氏はそのような視点で企画を考え、自ら取材に赴いていたそうです。また、その発信方法は紙面だけにとどまりません。『島民』と連携し、講演会やツアー等を行う「ナカノシマ大学」等を行い、各々の方法の良さを活かしながらローカル性を引き出し、発信しています。まちづくりに関わっていると、自分が住んでいる場所のことをどうすれば面白がってもらえるのだろうか…とよく考えます。『島民』の持つローカル性、その発信方法に様々なヒントを得ることが出来ました。（小島みのり）

近況 &イベントのお知らせ

受賞しました

建築学会の優秀修士論文賞を受賞しました！

筈谷友紀子：
都市・地域プランニンググループ

この度、建築学会の優秀修士論文賞を受賞しました。修士論文の題目は「空間の残存に着目した悲劇の記憶の継承メカニズムに関する考察」です。空間が残ることで悲劇の記憶はどのように継承されるのかという問いを立て、ハンセン病の隔離施設や被爆遺構でありながら加害の象徴でもある長崎刑務所浦上支所の保存をめぐる議論と継承活動の展開を分析しました。悲劇を象徴する空間は、歴史的建造物などとは違い明らかな建築学的価値を持ちません。悲劇性や教訓、すなわち記憶の継承そのものが保存価値となります。本研究では、様々な異論を乗り越えながらも、空間が記憶の継承に結びつけられ、希求される過程を明らかにしました。

研究を進めるにあたっては指導教員や副査の先生のほか、市民参加や社会学など様々な専門分野の先生にご助言をいただきました。建築学会の賞ではありますが、建築という領域に留まらない点が評価いただけたのかと思います。今後は修論の成果を学会論文にすることを目標に、精進したいと思います。

日本景観生態学会 2021 年度論文奨励賞を受賞しました！

末次優花：
サスティナビリティマネジメントグループ

この度、日本景観生態学会 2021 年度論文奨励賞を受賞しました。受賞論文は、菅井理恵氏、日置佳之教授（鳥取大学農学部）、田中一郎氏および土居克夫氏（NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部）との共著であり、主題は「オオタカ (Accipiter gentilis) の生息に配慮したマツ林管理に関する事例研究」です。

この研究では、「人間活動（林業）」と「自然環境の保全」の両立というテーマで取り組みました。鳥取県大山山麓に位置する「鳥取県立大山オオタカの森」を研究地として、かつて有名であったブランド材「大山（だいせん）マツ」の生育するアカマツ人工林の管理と、希少種であるオオタカをはじめとした生物多様性保全の両立の可能性について探りました。調査では植物・鳥類に着目し、森林施業により鳥類の多様性に大きな影響は生じていないことが明らかとなりました。また、①オオタカが営巣木として利用できる大径高木の育成、②オオタカの林内の飛翔空間の確保、以上２点を目指す森林管理は、「アカマツ人工林の育成」と「生物多様性とオオタカの生息地の保全」の両方にとって適切であることが明らかとなりました。

人間活動は、自然などの環境に対して、良くも悪くも影響を与えます。逆に人間も環境のなかで生活しており影響を受けています。より良い共存の形を探して、今後も業務・研究等に取り組みたいと思います。

大山オオタカの森のアカマツは大径通直で梁など建築用材として人気です

南葵育英会の話

三輪泰司
名誉会長

「南葵」とは、紀州徳川家のことです。

はじまりは、西岡醇先生のご紹介です。立売西町、四条東洞院、フコク生命ビル（現・日本生命四条ビル）7 階で、内科診療所を開設されていました。大丸さんもアルパックも同じ町内会で西岡内科診療所が、職場医でした。

同じ町内のとんかつや老舗「大江戸」での新年会では、西岡先生に上座にお座り願っていました。西岡先生は京大医学部では、岡本道雄総長と同期で、たいへん親しい仲でした。

南葵育英会は、紀州徳川家が設立され公益財団法人になっています。西岡先生は、和歌山のご出身で、役員をされていた南葵育英会の学生寮改築のご相談を、いただいたのです。南葵育英会は、和歌山出身の学生ために、京都と東京で、学生寮と奨学金制度を運営していました。機関誌も出しています。

事務局は、東京・銀座にあって、林正道・専務理事の会社・内外施設工業が引き受けていました。内外施設工業は空調設備などとともに、お菓子製造プラントのメーカーとしては、圧倒的シェアーなのですが、お菓子は有名でもカゲで見えないのです。

京都・北白川の学生寮は、食堂、浴場なども整っていますが、広いニワには子どもの遊具もあって、近隣とも仲よく交流できるようになっていました。

設計監理は、松木一恭君が担当して完成しました。

私達は、次代を担う若者のために、育英会を支えておられる内外施設工業のみなさんの、黙々とご奉仕するスガタに、深い感動をいただいたのです。

久しぶりにお便りをいただきました。レターズ・アルパックのご縁です。

Letters Arpak
レターズアルパック

〔レターズアルパック〕229号　2021年9月発行（株）地域計画建築研究所　https://www.arpak.co.jp

まちかど

名古屋の下町歴史巡りと アルパック名古屋の仕事の足跡

尾関利勝：
名古屋事務所

居酒屋「五條」（栄生）

城下町名古屋と堀川

名古屋は1610年開府の城下町を下敷きに、都市を形成している。

尾張は木曽三川の沖積地に形成された千年以上の歴史を持つ荘園地帯で、戦国武将発生の舞台となった。城下町は海抜十メートルの名古屋台地の上、那古野（なごや）庄と言われた荘園跡の新都市。旧街道が城下から放射状に各地を結び、東海道とは本町通から名古屋道を経て七里の渡の湊・宮の宿で接続していた。名古屋城と城下町の築造とほぼ同時に、堀川が開削される。堀川は築城の資材輸送に始まり、城下町の生計を維持する物資輸送路として、近代まで活用されていた。

名古屋で最も古い商店街

堀川上流の五条橋。橋の南、堀川右岸に、石垣に白壁土蔵が並ぶ四間道（防火で道を四間に拡幅）がある。名古屋では城下町の誕生を清須越しと言う。四間道は清須越し七人衆と言われ、清須から移住した大商人が住んだ由緒ある町並みでもある。五条橋から東は京町通、京都から移住した薬商などの上町。西が美濃街道と重なる円頓寺商店街の下町。当初は築城に関わる人足の遊興で賑わい、18世紀以後、円頓寺などの門前町として栄え、最盛期には映画館もあったが、その後、シャッター通となり、女性主導の下町衆の努力で復活しつつある。

名古屋の商店街事情

名古屋では大須商店街の賑わいが知られる。世の中の景気が良い時は大須が衰退し、景気が悪い時は大須が元気だとは大須商店街幹部の談。大須の他、復活する円頓寺を除いて、名古屋の商店街は壊滅的に衰退。商店街の盛んな東京・京都・大阪とは比較にならない。名古屋は大型店と車が多いことが影響している。

円頓寺商店街　東と西の端

五条橋西の袂、5時開店と同時に満席の居酒屋「五條」。44年前の元八百屋の空き店舗活用先進例、店内は口の字カウンター。看板は「どて焼き」だが、焼き鳥、串カツ、どて、奴など名古屋型居酒屋の典型。千円札2枚でおつり。

円頓寺商店街を外れて西の端、栄生（さこう）に屋台風串カツ屋の集積で有名な居酒屋街がある。

栄生には我が国最大の企業博物館、トヨタ産業技術記念館がある。お年寄りの学習会で産業技術記念館を学習後、ノミニケーションは近くの串カツ屋街にある居酒屋「五條」。同名の不思議を尋ねると、五条橋袂の店は妹に譲り、ご自身が栄生を経営する兄妹店との答え。なるほど品書きも同じ、価格も千円札2枚でおつり。話を聞いて点が線になった。

トヨタ産業技術記念館

トヨタ財団のご依頼とご指導で構想・基本計画を私どもがとりまとめ。倉庫となっていた煉瓦壁の旧織布工場を企業記念施設の博物館とする歴史的建造物活用計画。建物調査は日本建築学会、博物館計画はトヨタ財団ご指導で私どもが担当し、トヨタグループに提案、後、実現した。

名古屋の下町歴史巡りとアルパック名古屋の仕事の足跡。ご希望があればご案内します。お尋ね下さい。

表紙写真：秋の風物詩　豊岡市野上の稲刈り（撮影　遠藤真森）

「レターズ アルパック」は、ホームページからもご覧いただけます。

arpak
アルパック（株）地域計画建築研究所　Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
https://www.arpak.co.jp　E-mail:info@arpak.co.jp

本社・京都事務所	〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82	TEL(075)221-5132	FAX(075)256-1764
大阪事務所	〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F	TEL(06)6205-3600	FAX(06)6205-3601
名古屋事務所	〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-27-2 日本生命笹島ビル17F	TEL(052)462-1030	FAX(052)462-1061
東京事務所	〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 ユニゾ内神田1丁目ビル4F	TEL(03)5244-5132	FAX(03)6273-7715
九州事務所	〒810-0802（株）よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F	TEL(092)283-2121	FAX(092)283-2128
滋賀営業所	〒527-0012 東近江市八日市本町9-14	TEL(0748)36-2065	FAX(0748)36-2168
ホーチミン（ベトナム）	No.187/7, Dien Bien Phu Street, Da Kao Ward,District1, Ho Chi Minh City, Vietnam		

再エネ100宣言 RE Action
この用紙は「びわ湖の森を元気にする」kikitoペーパーを使用しています。